27E-pm09

慶應義塾大学病院における実務実習での代表的８疾患に関する取り組み

○池淵 由香[1], 島村 奈緒美[1], 津田 壮一郎[1], 青森 達[1,2], 別府 紀子[1], 山口 雅也[1], 望月 眞弓[1,2]（[1]慶應大病院薬，[2]慶應大薬）

【背景・目的】改訂薬学教育モデル・コアカリキュラムでは、薬学臨床の学習で関わるべき代表的な８疾患（以下、８疾患）を提示し、実務実習生（以下、実習生）がこれらの疾患を持つ患者の薬物治療に広く継続的に関わることを求めている。現在慶應義塾大学病院で行っている服薬指導実習プログラムが 8 疾患をどの程度満たしているかを調査し改善策を実施した成果を報告する。

【方法】平成 28 年度第Ⅰ期 18 名、第Ⅱ期 16 名の実習生を対象とした。第Ⅰ期では 8 疾患への関わりと継続性に関する調査票を作成し、実態を把握した。第Ⅰ期の結果を踏まえ第Ⅱ期は①実習開始時に 8 疾患に該当する疾患の一覧を作成し指導者と実習生へ提示、②服薬指導実習スケジュールを１週間単位隔週の実施から、一部 2 週間連続期間へ変更、③毎日の振り返りの際に 8 疾患への関わりについて実習生と共有、の 3 つを実施し最終的に 8 疾患への関わりと継続性について 5 段階のスコアを設定し評価した。また、実習終了時には実習生に対して服薬指導実習に関する満足度アンケートを実施した。

【結果・考察】第Ⅰ期の調査にて、実習困難な疾患の存在と実習生の間の実習疾患の偏りが明らかとなった。第Ⅱ期では改善策取り入れにて、指導者による 8 疾患の該当判断が簡易化され、実習生が継続的に同一患者に関わる機会が増えた。その結果第Ⅱ期では総合的にスコアが増えた。実習生の間の疾患の偏りについて、全員が 8 疾患全てに関わるには至らなかったが改善傾向を示した。アンケート結果より改善策前後の満足度はⅠ期とⅡ期でほぼ同様だが、第Ⅱ期では 8 疾患に対して実習生の意識付けとなったと感じる感想もみられた。今後、服薬指導実習で実習不可能な部分については調剤実習等で補填する体制作りを検討することを考えている。